

人間の本性についての考察 — ショーペンハウアー、リルケ、ホイジンガー、ドーキンス —

水沼 和夫[†]

Betrachtungen von der menschlichen Natur — Schopenhauer, Rilke, Huizinga, Dawkins —

Kazuo MIZUNUMA[†]

ABSTRACT

Das Buch *Das egoistische Gen* von R.Dawkins wurde mit dessen drastischen Adjektiv weltweit bekannt. Die Wirkungen des egoistischen Gens haben doch wesentliche Ähnlichkeiten mit der Wirkungen des blinden Willens in der von A.Schopenhauer am Anfang des 19.Jahrhunderts geschriebenen *Welt als Wille und Vorstellung*. Die folgenden Notizen sollten *das egoistische Gen*, *den blinden Willen* und *das Fremde* von Dichter Rilke als Schlüsselwörter für die menschlichen Natur betrachten, und anschließend eine unentwehrliche Funktion des egoistischen Gen für Spielen des Johan Huizingas hinweisen.

Key Words: Huizinga, Spiel, *das egoistische Gen*, *das Fremde*, *der blinde Wille*

キーワード: ホイジンガー, 遊び, 利己的遺伝子, 冷淡なもの, 盲目の意志

1. はじめに

ここに示す「人間の本性」に関する考察ノートは、まだ断片に過ぎない。断片であるにも拘らず、それを特に書き留めておく必要を感じたのは、数々の先人たちによって始められ、多様な分野の多様な才能が飽くことなく携わってきたこのテーマを巡る知的活動の道筋において、今、一つの収束点が、彷彿としつつあるかのように思われるからである。ただし、この劇的な進展に大きく貢献しているのは、それを長らく主要なテーマとしてきた文学や哲学などの分野

における成果というよりは、遺伝子研究を核とした進化生物学者たちあるいは社会生物学者たちによる研究成果だと言わなければならない。

それは、人文科学分野や芸術に於けるこれまでの活動や業績が、現代の進化生物学が辿り着きつつある人間の問題をいち早く捉えていたという事実の価値を減じるものでは勿論ない。但し、そこに依然として克服されなければならない、あるいは新たに認識された「人間の問題」が見出されるとするなら、それに対する論究には、分野横断的な視点がこれまで以上に要求されることになるだろう。その認識が、この考察ノートを書かせた、と言ってよい。

平成 29 年 1 月 10 日 受付

[†] 感性デザイン学部感性デザイン学科・教授

2. 「盲目の意志」としての「利己的遺伝子」

アルトゥール・ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』は1819年に、リチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』は1976年に出版されている。その間には160年近い歳月が横たわっているが、両者における「盲目の意志」と「利己的遺伝子」の共通性は、驚きに値する。（引用には、前者については西尾幹二訳、後者については日高敏隆訳を用いた）

2.1 動物行動学者ショーペンハウアー

「世界は私の表象である（Die Welt ist meine Vorstellung.）」という一文で始められるショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』は、それに続く箇所での最初の図式化の一面性を自ら指摘しながら、追ってそれを補うべく「第二の真理」に予備的に触れる。

その真理はわれわれがこの第一巻で出発点としている真理ほど直接的に確実ではない。これよりもっと深い研究と、もっと困難な抽象と、異なるものの分離や同じものの結合といった作業をおこなうことではじめてこの二番目の真理に達するであろう。—この二番目の真理はきわめて厳粛であって、なにびとも恐ろしいというほどではなくても、いぶかしい、と思われるに違いないひとつの真理なのである。すなわちなにびとも次のように言うことができるし、また言わなければならない、「世界は私の意志である（Die Welt ist mein Wille.）」と。¹⁾

そして事実、ショーペンハウアーは「第二巻」の導入部で当時の形態学や生理学、博物学の成果や現状に触れながら「もっと深い研究と、もっと困難な抽象と、異なるものの分離や同じものの結合といった作業」を行った後で次のように言う。

一連の行動、したがって個別的な行動も、同様に行動の条件も、行動を行う全身体そのものも、ということは身体を成り立たせている過程ということだが、これらはまさしく意志の現象にほかならず、意志が目に見えるかたちをとったもの、意志の客体性以外のなにものでもない。²⁾

「現象する諸力の内的な本質」の追求から導かれた、ショーペンハウアーのこの「意志」は、チャールズ・ドーキンスの「利己的遺伝子」にほぼそのまま重なり合う。つまり、個体としての身体自体、またその行動も、ともに遺伝子プログラムによって成り立っているのである。興味深いのは、哲学者ショーペンハウアーにとっても、動物行動学者としての視点が重要であった、ということだ。

生まれて1年目の鳥は、卵についていかなる表象ももたないが、卵のために巣を作る。また蜘蛛は、獲物について何の表象をもっていないのに、獲物を捕まえようと網を張る。また生まれてはじめて落とし穴を掘る蟻地獄は、まだ蟻について何らの表象ももっているわけではない。くわがた虫の幼虫は木の中に穴をかじりあけて、その中で成虫への脱皮に耐えようとするが、この場合、雄の幼虫になるとときには雌の幼虫になるときの二倍の大きさに穴をかじりあけておく。それはオスの幼虫には角が生えるので、この角の場所をとっておくためだが、まだ幼虫でいるうちには、角について何の表象ももっているわけではないのだ。—

動物のこのような行動には、動物の他の行動におけると同様に、意志が活動していることは何としても明瞭である。ただしこの意志は盲目の活動状態

にあり、この活動状態はなるほど認識を伴ってはいるが、認識に導かれているわけではないのだ。意志が活動するためには、動機という表象がなんら必然的な、本質的な条件でないことを、われわれはひとたび確然と悟るならば、意志の働きがあまり目立たないような場合にも意志が働いているのをたやすく認めることであろう。[中略]人間においてもこの同じ意志が盲目的に働くことはしばしばである。認識に導かれない人間の身体のすべての機能、そのすべての生命的で植物的な過程、つまり、消化、血液の循環、分泌、成長、再生などにおいて意志は盲目的に働いている。身体の活動のみならず、身体そのものが、さきに示したように、徹頭徹尾、意志の現象であり、客観化された意志であり、具体化された意志なのである。だから、身体のなかで起こることはすべて、意志によって起こっているのに違いない。とはいえここでいう意志は、認識によって導かれることもなく、動機によって規定されることなく、盲目的に働きながら、この場合刺戟と呼ばれる原因によって規定されているのである。³⁾

鳥の巣作りは、現代生物学でも、「学習」によるものではなく、文字通りの意味で「遺伝子情報」による「生得的」な行動であることが確認されている。このような動物たちの行動について、ショーペンハウアーが「意志が活動している」と言うのは、ここで言う「意志」がそもそも「全自然の内奥の本質」を示すための術語であるからで、ドーキンスならば「遺伝子が…」というところである。それは「人間においてもこの同じ意志が盲目的に働くことはしばしばである」という記述にも通じる。こちらは人間が行う「生得的」行動が意外に少なくないことについての指摘と解釈できる。具体例が示さ

れていないものの、現代の知見から補うなら、「よそ者嫌い」や「みせびらかし行動」「目上の者に対するニタニタ笑い」「甘いもの好き」や「赤ちゃんを見ると思わず微笑み、細高声で話しかける」などは、どれも特に理由もなく誰もがそうしてしまう所謂「生得的行動」である。これには「遺伝子」が関与している。

我われの関心事として、差しあたって補足すべき点は、遺伝的基盤から生じる鳥類や昆虫の行動についてショーペンハウアーが言う「意志」と、人間の「身体の内なかで起こることはすべて、意志によって起こっているのに違いない」という時の「意志」が同じものであるなら、この「意志」なるものは、「身体そのもの」が「徹頭徹尾、意志の現象」であるからには「認識」に導かれていようといまいと、常に機能し続けていると考えられるのであって、その意味では「盲目的な意志」こそが「全自然の内奥の本質」である、とするのがより簡潔であろう、ということだ。事実、この「意志」は「盲目の意志」として世界に知られるところとなったのだから。

ところで、この「盲目の意志」は現代の進化生物学が「遺伝子」の機能として明らかにしつつあるところを、ことごとく先取りしているのである。既に触れたが「意志の働きがあまり目立たないような場合にも意志が働いている」などという記述も、「意志」を「遺伝子」に読み替えるなら、それは、我われの、思いのほか頻繁に行う「生得的行動」への反省を促すものと受け取り得る。しかも、ショーペンハウアーは「誰でも自分を、その個々の行動においてさえも、完全に自由であると思ひこみ、いつなんどきでも（自由に）別の生活態度を始めることができる」という我われの陥りやすい錯覚についても指摘している。

また人間の「身体」が「徹頭徹尾、意志の現象」である、という見方自体も、まさしく「遺伝子」と「個体」との関係にそのまま置き直して見る事が可能である。「個体」と「物自体としての意志」「生きんとする意志」との関係は、「第二考察」においても取り上げられ、

「無から現れ出て来て、おのが生命をあたかも贈り物のようにして受け取り、やがて死を通じてその贈り物を喪失して無へと戻っていくのが個体だ」⁴⁾と記述されている。それはドーキンスの「遺伝子の乗り物としての個体」という図式に相当する。

2.2 ドーキンスの「利己的遺伝子」

『利己的な遺伝子』はリチャード・ドーキンスが、遺伝子による進化について述べた彼の名著である。その冒頭では、彼が「利己的な」という形容詞を取って用いた理由が示される。

私がこれから述べるのは、成功した遺伝子に期待される特質のうちでもっとも重要なのは非情な利己主義である、ということである。普通、この遺伝子の利己主義 (gene selfishness) は、個体の行動における利己主義を生み出す。しかし、いずれ述べるように、遺伝子が個体レベルにおけるある限られた形の利他主義を助長することによって、もっともよく自分自身の利己的な目標を達成できるような特別な状況も存在するのである。[中略] そうでないと信じたいのは山々だが、普遍的な愛とか種全体の繁栄とかいうものは、進化的には意味をなさない概念にすぎない。⁵⁾

そして、次のように続ける。それはこのノートで展開しようとしている論考の動機の一つでもある。

われわれが利己的に生まれついている以上、われわれは寛大さと利他主義を教えることを試みようではないか。われわれ自身の利己的遺伝子が何をしようとしてるかを理解しようではないか。そうすれば、少なくともわれわれは、遺伝子の意図をくつがえすチャンス、すなわち他の種がけっして望んだことのないものを

つかめるかもしれないのだから。⁶⁾

彼の「利己的な」という形容詞には、定説化した「種の保存説」やそれに類似する「群れ淘汰」理論を一掃する意図が込められている、という側面を見ておく必要がある。「種」のためであれ「群れ」のためであれ、自らを進んで犠牲にするようなプログラミングを含み持った遺伝子が、自然淘汰を乗り越え「成功した遺伝子」となる可能性はない、というのである。もっとも、これに関しては、嘗ては同陣営に位置した E. O. ウィルソンが、群淘汰をヒトなどの真社会性生物の主要な進化要因であるとする説を主張しつつあり、議論の余地がないわけではない。

いずれにしても、敢えて「利己的」という形容詞を用いることによって、一方でドーキンスは、「利他主義的」な行動の進化の事実をも認め「われわれは一生涯遺伝子に従うよう強制されているわけではない」という点にも言及しなければならないなど、自己矛盾ぎりぎりの論述を余儀なくされるのである。彼の説明はさらに続く。

私は、「ヒヒの行動を見れば、その行動が利己的であることがわかるだろう、だから人間の行動も利己的であると思われる」といおうとしてるのではない。[中略] 人間もヒヒも自然淘汰によって進化してきた。自然淘汰の働き方をみれば、自然淘汰によって進化してきたものは、なんであれ利己的なはずだということになる。それゆえ、われわれは、ヒヒ、人間、その他のあらゆる生き物の行動をみれば、その行動が利己的であることがわかる、と考えねばならない。もしこの予想が誤りであることがわかったならば、つまり、人間の行動が真に利他的であることが観察されたならば、そのときわれわれは、困惑させられる事態、説明を要する事態にぶつかるであろう。⁷⁾

それは、地球上の生命発生以来の約 37 億年という気の遠くなる歳月の「自然淘汰」の結果として、生命体の全てが身に付けているに違いない特性を指しているのである。利他性を基本的戦略とする生命体が日々の自然淘汰を経て 37 億年を生き延びる可能性は皆無と言わなければならない。しかしながら、既に述べたように「利己的な」という形容が適当であったかどうかは、大いに疑わしいところではある。

ところで、個体そのものは、それが利他的であれ利己的であれ、必ず死滅する。死滅する個体が自然淘汰を経て進化を遂げ続けているように見えるのは、進化の主体が、個体そのものではなく、個体形成の全プログラム情報を担う遺伝子であるからだ。個体は「遺伝子の乗り物」に過ぎない。遺伝子は、生き延びるためのあらゆる情報を蓄積し、あらゆる考えられる状況に対処しようとする。より厳密に言えば、膨大な歳月に亘る自然淘汰の結果としてそのような適応性を備えたものだけが生き残ってきたのである。それは個体が生き延びるためではなく、遺伝子自身が生き延びるため、究極的には、遺伝子がよりよく自己複製を継続的に達成するためである。そして、自己複製に伴う非常に稀なミスが変種を生み、そこに生じる遺伝情報の有利不利が自然淘汰を経て安定すれば、それを我われは進化と呼ぶのである。

事実あまり有利でない種類は競争によって数が減っていき、ついにはその系統の多くのものが死滅してしまったに違いない。自己複製子の変種間には生存競争があった。それらの自己複製子は自ら闘っていることなど知らなかったし、それで悩むことはなかった。この闘いは何の悪感情も伴わずに、というよりも何の感情もさしはさまずにおこなわれた。⁸⁾

時には排他的な戦略が功を奏する場合がある

にしても、それは当然ながら無感情の成り行きの一例に過ぎないのであって、「利己的」に見えても「認識に導かれて」はいないのであるから、命名としてはショーペンハウアーの「盲目の意志」の方がより適当だと言える。『利己的な遺伝子』の結びは、正しく「盲目の意志」を現代に蘇らせたかのような一文で締めくくられている。

宇宙のどんな場所であれ、生命が生じるために存在しなければならなかった唯一の実体は、不滅の自己複製子である。⁹⁾

3. リルケの「冷淡なもの」：das Fremde

1902 年に出版された『ヴォルプスヴェーデ』の「序」で、詩人ライナー・マリーア・リルケは西洋絵画史上に於ける風景画の成立を概観しながら「風景は私たちにとって冷淡なものである」と断じる。

本筋に入る前に確認しておきたいのは、「冷淡な」というこの訳が、戦後日本のリルケ研究を主導した一人である富士川英郎によるもので、原語はドイツ語の形容詞「fremd」を名詞化したものである、ということだ。富士川氏だけの独特な訳で、他の学者たちはこぞって「異質な」などと訳している。初学者だった頃の私自身は富士川氏の著作でリルケを学んだ経緯もあって、暫くは「冷淡な」だけを採用していた。今またこの考察ノートでこの訳を採用するに至ったのは、全体の文脈に「冷淡な」がより適していると感じられるからである。

ところで、リルケはベルリン大学に籍を置いていた頃、「進化論」の講義を履修した、という記録が残っている。つまり、彼は我われ人類が地球上の全生物の一員であることを知っていたのである。後になって「社会ダーウィニズム」の悪名と呼ばれるダーウィン進化論の誤用や悪用が氾濫した、まさにその時代であった。彼の論考は以下のように続く。

勿論、この場合、自然と私たちの血縁に言及するひとがいるかもしれませんが。私たちは一本の巨大な進化系統樹の最後の果実として、この自然から生まれたのですから。しかし、そのようなひとでも、私たちがこの系統樹を、私たちを起点として、梢から梢へ、枝から枝へと降りてゆくと、それがたちまちのうちに死滅した巨大動物たちの棲む闇のなかへ、敵意と憎悪に満ちた怪物の棲む闇のなかへと消えてゆくのを、また更に過去へと遡るなら、いよいよ冷淡な、いよいよ恐るべき生き物たちに行き当たることになるのを、そのため私たちは自然こそは背後における万物のなかで最も恐るべき最も冷淡なものであることを認めざるを得ないのだ、ということを否定することはできません。人類は何千年にも亘って自然と交流しているという事実も、この関係にほとんど影響を与えません。それは非常に一方的なものであるからです。私たちが自然を耕したりその力の一部を恐る恐る利用ても、自然はそんなことなど何も知らないままであるように思われます。わたしたちは多くの土地で自然の豊穰性を高めるかと思えば、一方では土くれに芽吹こうとしていた春を都会の舗装で窒息させてしまうのです。私たちは川の流れを工場に引き込みますが、川は彼らが回している機械のことは何も知らないのです。私たちが自分たちが名付けただけでは捉えきれない模糊とした力を、子供が火で遊ぶように遊んでいるのです。私たちが登場してそれらの力をかりそめの生活のために用いるために、すべてのエネルギーが使われぬままに残っていたのだと思える瞬間がありますが、数千年後にはその力は繰り返しその名を払い落として立ち上がるのです。抑圧された階級の蜂起のように、彼らのか弱な主人たちに反抗して、いや、それらへの反抗でさ

えなく、彼らはただ単に立ち上がるのです。こうして諸文化は大地の両肩から滑り落ちる。大地は再び偉大さと広大さを取り戻し、海と樹と星だけを持つのみとなるのです。¹⁰⁾

人類を「系統樹の最後の果実」としているところは、進化論の当時の水準を示しているのだろう。もっとも、現代でもまだ、我われヒトがチンパンジーから進化したのではなく、ヒトとチンパンジーの「共通祖先」が分岐して、ヒト、チンパンジーが誕生した、と正しく理解している人ばかりではない。リルケの記述に戻ると、19世紀に盛んだった博物学や地質学研究に伴う絶滅生物発掘の豊富な事例が、ヨーロッパ社会にダーヴィンの〈自然選択説〉の受容を準備させていたらしいことも、そこから読み取ることができる。また、宗教的と見られる詩作品を多く残したリルケが、我われヒトが神によってではなく「自然」から生まれたことを明確に認識していたことをこうして確認できることも、無意味ではない。そのリルケが生物進化の本質的部分に「残忍な」ものを感じ、それとの「血縁」にも拘わらず「冷淡なもの」として距離をとるのは、現代人のドーキンスが遺伝子に「利己的な」ものを感じていることと似ている。こうした意識の裏には、キリスト教徒としての神聖なるものへの畏敬の念が感じられる。一方で、リルケの場合には、引用の後半部に見られるような、自然を利用し尽くそうとする19世紀的自然観の傲慢さへの批判も特徴的である。「冷淡なもの」という表現には、西洋近代文明批判も込められているようである。いずれにしても、進化論が突きつける問いをいわば封印したまま、リルケは彼の修業時代を歩んだようだ。そして、1915年、40歳になって、彼はある書簡の中でもう一度この「冷淡なもの」に向き合うのである。

人間が太初の始めから神々を築いてきたことは周知のところですが、これらの

神々の内部のいたるところに死とか脅やかしやぞっとするもの、暴力や怒り、超人格の麻痺といったものばかりが含まれていて、結び合わされていわば一つの密度の濃い性悪な集合体となっているのですが、この集合体は、*das Fremde* 冷淡なものの、と呼ぶこともできるものです。ただし、この冷淡なものには、ある種の秘密に満ちた血縁や一体性のために、人々がそれを認め、耐え、否、それどころか承認してきたということが認められます。即ち、人々もまた冷淡なもの だったので。ただ、人々は自らの体験のこうした側面について、差し当たっては、全く手をつけることができませんでした。それらはあまりに大き過ぎ、あまりに危険で、あまりに多様で、人々を超えて成長し、過剰な意味を持つに至ったのです。一方で、利用や効率を第一義とする生活の要求が大きかったのですから、こうした手のつけられない扱いにくい状態を常に携えていくことは不可能でした。そこで、人々は、それをあちらこちらへと除外しておくことで一致したのです。¹¹⁾

神事のことごとくは、ホイジンガーの指摘のように、「遊び」として、現実生活とは明確に切り離され限定された時間・空間において举行される。それは、上のリルケの記述に従えば「冷淡なもの」を「利用や効率を第一義とする生活」の外側の「あちらこちらへと除外しておくこと」に他ならない。ホイジンガーにとって、それは文化の成立過程である。しかし、文化は「利己的遺伝子」の「競い合い好み」の性向を無害化する仕掛けでもある、と見ることもできるのであるから、「利用や効率を第一義とする生活の要求」が大きくなり過ぎて「文化」を軽んじることがあるとしたら、大いに危険である。ホイジンガーは、『ホモ・ルーデンス』の最終章で「ヒステリックな大衆の反応」に働き掛けようとするナチのプロパガンダを厳しく批判

しているが、そのプロパガンダに従った実に多くの人々は、それがどのような結果を招くことになるのかを、未曾有の惨劇に終わるその後の数年間を辛うじて生き延び得た場合に限られるが、身をもって知ることになる。

1915 年のリルケが感じとっていたものも、「利用や効率を第一義とする生活の要求」に応じて成立したはずの西欧社会の伝統文化が、内包する宗教的な根拠を薄める一方で、生物学的な冷淡さが表面化しつつある状況だと見ることができる。自然との「血縁」を、今のリルケは、我われ自身の持つ「冷淡なもの」として実感しているのである。第一次世界大戦はこの時既に始まり、彼自身も軍務につくことを余儀なくされていた。開戦時の国民的熱狂も体験した詩人は、自らの「冷淡なもの」が、「あまりに大き過ぎ、あまりに危険で、あまりに多様」なものとなり、「人々を超えて成長し、過剰な意味を持つに至った」のを見たのである。

4. ホイジンガーの『ホモ・ルーデンス』

ヨハン・ホイジンガーの『ホモ・ルーデンス』は、文化に先行する行動としての「遊び」を考察することによって、「遊び」こそ人間の本性であることを明らかにした画期的研究である。1938 年に出版された。以下では、「遊び」と「利己的遺伝子」あるいは「盲目の意志」との関係について考察する。

その冒頭の部分は、「心理学」と「生理学」の境界分野を意識しながら次のように言っている。(引用には里見元一郎訳を用いた)

ここでいちはやく一つの非常に重要な問題点に注目しておかなければならない。遊びはすでにそのもっとも単純な形においてすら、純生理的現象以上のもの、もしくは純生理的に規定された心理的反射作用を超えた何ものかである。このようなものとしての遊びは純生物的、あるいは単なる身体的活動の限界を超えている。遊びは一つの

意味深長な機能なのだ。遊びの中には生活維持への直接的な欲求を越え、しかも、生の営みの中に一つの意味を付け加える何ものかが、共に「遊んで」いる。それぞれの遊びが何らかの意味をもっている。遊びの本質をなすべき積極的原理を精神と名付ければ、いささか言い過ぎになり、これを本能と名付ければ、何も言わないに等しい。それを何と見立てようと、遊びのこのような「意味」と共に、遊びの本質自体の中に、非物質的要素がはっきりと現われてくる。

¹²⁾

そしてホイジンガーは次のような問いを立てる。「よろしい、ではいったい、遊びの〈おもしろさ〉とは何なのか」と。そして「自然は我々に遊びを、その緊張感と喜びと〈おもしろさ〉と一緒に与えてくれたのだ」とした後で、この「おもしろさ(aardigheid)」というオランダ語が、「本性」を意味する aard から転じたもので、つまりは、それ以上は遡ることが不可能な概念である、という事実を指摘する。そして、このことが遊びの本質を明示している、というのである。

この問いかけは、ホイジンガーの論考においても最初の重要事項の一つであるが、この考察ノートにおいては、さらに重要である。なぜならば、我われヒトの行動や心の動きが、他のあらゆる「形質」と同様に、進化の所産として与えられている、という進化生物学の見地に立つ時、我われが遊びを欲し、遊びに駆り立てられ、遊びに興奮を覚えるのは、ホイジンガーの言う「純生理的現象以上のもの」どころか、まさしく「純生理的現象」に他ならない、と考えられるであろうから。ヒトは、面白いから遊ぶ、遊ばないでいられないから遊ぶ、のである。

このように「遊ばないでいられない」ヒトは、生得的な欲求として遊びを必要とする。それは我われヒトと他の類人猿とを隔てるメルクマールの一つと言ってよい。ホイジンガーが指摘するように、動物たちも確かに遊ぶ。ただし、大人の動物たちが遊ぶ例はほとんどない。チンパ

ンジーやゴリラのオスが子供の相手をする例はよく知られている。チンパンジーの母親も子供と声をあげて面白そうに遊ぶ様子が観察されている。ボノボも含め我われヒトの仲間でもある類人猿は、大人になっても幾分は「遊び」を行う。しかし、ヒトのように頻繁ではない。彼らに比較して、ヒトは大人になってからも、霊長類や犬猫の仔と同じように遊びを渴望する。

5. 遊びの生得性

『ホモ・ルーデンス』が書かれたのは、遺伝子研究の成果など全く皆無だった 1930 年代であるが、その冒頭で、ホイジンガー自身はこの問題を誠実に処理しようと努めている。

現実の遊びそのものは誰の目にも明らかのように、動物界、人間界の両方にまたがって広がっている。それはどんな合理的関連性に根ざすものでもない。なぜなら、理性に基づいた存在であれば、遊びは人間世界に限られるだろう。[中略]動物は遊ぶことができる。だから、彼らはすでにその点で単なる機械仕掛け以上のものである。我々は遊び、かつ、遊ぶことを知っている。だから、我々は単なる理性的存在より上のものである。なぜなら、遊びは非理性的なものであるから。¹³⁾

遊ぶ時の我われヒトが理性的存在ではないのは遊ぶという行為が生得的であるからだ。我われは遊ぶ時、「動物界、人間界の両方に」またがった生得的行為としての遊びを遊んでいるのである。しかし、遊ぶ彼らが、我われを含めて「機械仕掛け以上のもの」である、と断言するのはどうか。子猫や子犬の遊びを観察すれば、彼らがむしろ機械仕掛けで、つまり、「遊びは楽しい」といった「遺伝子プログラム」に突き動かされて遊んでいることがわかるだろう。

機械仕掛けという点では、ホイジンガーによって頻繁に触れられる例である雄の鳥類による

ディスプレイも、やはり遺伝子に突き動かされた生得的行動である。

孔雀や七面鳥の類はその羽毛の華麗さを雌の前でみせびらかしてみせる。しかしこのみせびらかしの中にすでに異常なもの、極度に特異なものを示して驚かそうという素振りが潜んでいる。鳥がそこで舞踏の足どりで歩いて見せれば、それはもう一つの演技であり、ありきたりの現実からの脱却、現実より一段と高級な秩序への転出である。¹⁴⁾

これらの見せびらかしやダンスは、「ありきたりの現実からの脱却」という見かけを持つものの、現代の進化生物学では「性淘汰」の典型的な現象例として知られている。自然淘汰を日常的現実とする生物界における、配偶の成否が決められるシーンなのである。これも遺伝的基盤を持った行動であるから機械仕掛けである。しかし、仔犬や仔猫の遊びの「遊びは楽しい」というプログラムとは別種だと考えられよう。飾り羽根を広げる雄鳥は成鳥であるからだ。

しかし、その見事なディスプレイに演劇的要素が感じられるのは確かであり、先史時代から人々によって「遊び」として模倣されてきたであろう。「みせびらかし」自体は、明らかに「動物界、人間界の両方に」またがって広がっている遺伝子的行動であり、特に配偶者獲得をめぐる行われる点でも共通している。

これらへの『ホモ・ルーデンス』における言及からは、ホイジンガーもまたショーペンハウアー同様に動物行動学者の側面を持っていて、それが彼のこの論考にインスピレーションを与え続けていることが分かる。

6. 美的感覚と進化

遊びの外観を持ちながらも、鳥たちの求愛

ダンスは雄鳥にとっては厳粛で仮借ない性淘汰の現場であるわけだが、それに華麗で時にはユーモラスな外観が与えられたのは、ホイジンガーがもう一つの大書『中世の秋』でヨーロッパ中世の人々の日々の営みに見た「美化」の意識が何らかの形で活動しているからなのか。そもそも「美の感覚」自体が、我われの進化に伴って形成されたものであると考えられており、その関係の研究も盛んに行われつつある。つまり、性淘汰を含め自然淘汰の長大な歴史の中で、我われが、というよりは我われの遺伝子を選好してきたものの特性の抽象化が「美」であって、それゆえに我われは理性を介さずに「美」に引き寄せられるのである。因みに、ショーペンハウアーはこの点でも驚くべき洞察を示していた。

純粹に後天的には、つまり単なる経験だけからでは、いかなる美の認識も可能にはならないであろう。つねに美の認識は、先天的である。¹⁵⁾

よく持ち出されるのは左右均衡への選好である。我われが「左右対称」を美的だと評価する傾向にあるのは、それが動物であれ植物であれ、病害虫とは無縁で、栄養も十分で、優良な遺伝子を有していると想定できる特徴を示しているからである。孔雀の美しい飾り羽根についても同様で、大きく華やかで艶やかであればあるほど雌鳥たちはそれに引き付けられるのである。雄鳥たちは美を競い、みせびらかしを展開する。そして、この競い合いもまた、遊びの非常に重要な特性である。美への感覚もまたそこから生み出された、と考えることができるのである。

ホイジンガーは『ホモ・ルーデンス』の第3章の表題を「文化を創造する機能としての遊びと競い合い」として、「遊び」と「競い合い」を並立させている。それは、「競い合い」が、「遊び」と一体化することによって、遊びを遊びたらしめているからである。そのような遊びの中で文化が生まれるのである。

競争と演技は娯楽として文化から生まれ出たのではなく、これらこそ文化に先行したのだ。¹⁶⁾

生存競争と言われる動物たちの世界ばかりでなく、我われヒトの現代生活においてもいたるところで競い合いが行われている。最近では、読書感想発表のような本来競争的要素の薄い活動がボクシング・リングを模した舞台設定で行われたりするほどに、我われは「競い合い」が好きなのである。

7. 「競い合い」とルール

ホイジンガーの図式化に従えば、遊びは文化に先行し、競い合いは遊びに先行する、と言えるのではないか。競争が「利己的遺伝子」のまさしく「本性」であることは言うまでもないからである。それは盲目的な行動となって現れる。このように競い合いを好む「利己的遺伝子」に突き動かされているらしい我われヒトが、文化を築き上げるに至るには、『ホモ・ルーデンス』が指摘するように、ルールの設定とその遵守が不可欠であったろう。ルールを作り、ルールを守ろうとする性向は、例を挙げれば、仔犬たちがじゃれ合いながら互いに「本気で噛まない」という抑制のルールをもっていることなどに既に見ることができる。雄ゴリラなどの成長期には、戯れのレスリングがやがて危険も伴うものとなり、それが若い雄たちに群れを離れる契機を与えことにもなるようだ。彼らはもう遊ぶことを止めるのである。

8. 結 び

大人になっても遊び続ける我われヒトは、何らかのルールを編み出し、それを互いに遵守しようとする。その生物学的基盤はきわめて脆弱だが、ルールを生み出すというこの行

為が、他の類人猿には比較しがたいホモ・サピエンスに特有の特別な傾向であることは確かかなようだ。

但し、我われヒトが常に優秀なルール制作者であるかどうかは大いに疑わしいところであり、絶えず、そのルールを突き崩そうとする矛盾する生得的性向とも対峙しなければならない。どのような場合にどのようなルールが必要で有効なのか、という問題を解決することは「遊ぶヒト」にとっても決して容易ではない。環境条件はつねに変動する。

一般論として言えることは、競い合い好きの「利己的遺伝子」の活動は当然ながら抑制しなければならないが、抑制が過ぎると遊びはつまらなくなる。同時に、優れたルールを持つ遊びでも時間の経過によって倦怠や腐敗が生じたりもする。遊びや社会にとっても、それは危険である。また、既存の秩序を遵守しようと努める傾向が、類人猿をはじめとする霊長類の社会行動のひとつとして認められるのも不安要因である。それがヒト社会の保守化傾向にも影響している可能性があるのではないか。淘汰圧が大きくなった際には特に、権威にひれ伏そうとする傾向が、我われヒトにはあるのではないか。また、集団をなした時の我われヒトの熱狂的な行動、他集団への敵対的姿勢への傾向は、チンパンジーたちと分岐する以前からの生得的なものなのではないのか。それは「盲目の意志」「利己的遺伝子」、そしてリルケが「冷淡なもの」と呼んだ我われ自身の「本性」の否定しがたい一面なのである。勿論、ドーキンスの言うように、我われには「遺伝子の意図をくつがえすチャンス」が与えられてはいる。

註 解

- 1) ショーペンハウアー『意志と表象としての世界Ⅰ』西尾幹二訳、中公クラシックス、2012、p.9
- 2) a,a,O, p.240
- 3) a,a,O, p.253f

- 4) ショーペンハウアー『意志と表象としての世界Ⅱ』
西尾幹二訳、中公クラシックス、2012、p.349
- 5) R.ドーキンス『利己的な遺伝子』日高敏隆他訳、紀
伊国屋書店、2006、p.3f
- 6) a,a,O, p.4
- 7) a,a,O, p.5f
- 8) a,a,O, P.27
- 9) a,a,O, P416
- 10) Rainer Maria Rilke,Sämtliche Werke, B5,Insel,
Frankfurt/M, 1902,p.12
- 11) Rainer Maria Rilke, Briefe,Insel,Frankfurt/M, 1966,
p.512
- 12) 『ホイジンガー全集Ⅰ ホモ・ルーデンス』里見元
一郎訳、川出書房新社、p.12
- 13) a,a,O, p.16
- 14) a,a,O, p.32

- 15) ショーペンハウアー、Ⅱ、p.123
- 16) ホイジンガー、p.88

その他の参考文献

1. 『リルケ 芸術と人生』富士川英朗訳編、白水
社、1971
2. 『チンパンジーの社会』西田利貞、東方出版、
2007
3. 『人類はどこから来てどこへ行くのか』E.O.ウ
ィルソン、斎藤隆央訳、化学同人社、2013
4. 『人間の進化と性淘汰』（ダーウィン著作集 1）Ch.
ダーウィン、長谷川真理子訳、文一総合出版、
1999
5. 『人類進化論 ―霊長類学からの展開―』山極寿一、
裳華房、2008

要 旨

R・ドーキンスによる『利己的な遺伝子』は、その形容詞の刺戟の強さのために出版以来世界中で読まれるところとなっているが、その「利己的遺伝子」の特性は多くの点で、19世紀初頭にA・ショーペンハウアーによって書かれた『意志と表象としての世界』における「盲目の意志」に類似している。このノートではこの類似性およびリルケの「冷淡なもの」との関連を考察し、更にはJ・ホイジンガーの『ホモ・ルーデンス』における「遊び」のための「利己的遺伝子」の機能の重要性を指摘した。

キーワード: ホイジンガー、遊び、利己的遺伝子、冷淡なもの、盲目の意志